

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2025年(令和7年)2月17日

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者名 李セボン

大学名・職位 成蹊大学・教授

第42回(令和5年度)櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称(英語も記入) Research Theme

中村正直のアメリカ政治体制理解の意義—『共和政治』を中心に

An Analysis of *Kyouwaseiji*: Masanao Nakamura's Understanding of the American Political System

※英文抄録(研究目的、経過、成果 250words以内) Abstract (Purpose, Process, Significance)

In 1873, Masanao Nakamura (1832-1891) translated Ransom Hooker Gillet's *The Federal Government*, an overview of American political institutions and laws, and published it as *Kyouwaseiji*(共和政治). *The Kyouwaseiji* has received little attention and has been mentioned only sparingly in the context of Nakamura's research. In this research, I analyzed what Nakamura sought by this translation and have clarified two points. The first is the circumstances surrounding Nakamura's translation work. In particular, I discussed its relation to Hirobumi Ito of the Meiji government. Second, since *The Kyouwaseiji* is a partial translation of *the Federal Government*, I was able to clarify that Nakamura focused on the founding process of the people who settled in the Americas in search of religious freedom, rather than on the political system of the United States at that time itself.

This research has been done to clarify the specifics of the understanding of the American political system in early Meiji Japan. It also has the significance of highlighting Nakamura Masanao as a political thinker and liberating him from the conventional label of "nonpolitical." In addition, by clarifying his attitude toward the "system," it reaffirms his identity as a Confucianist and calls for a reconsideration of the views of Confucianism in modern Japan.

※研究の目的・研究方法・意義(日本文600字以内)

本研究は、明治六年に刊行された中村正直の翻訳書『共和政治』(原著:Ransom Gillet, *The Federal Government; it Officers And Their Duties*, 1871)というテキストを手がかりに、明治初

期日本におけるアメリカの政治体制理解を分析するものである。『共和政治』は、アメリカの建国史から憲法の内容、具体的な政治体制の諸側面を概説した原著の全五十七章の中、二十五章までを翻訳したものである。「王政復古」を掲げて誕生した明治政府のもとで、君主の存在を想定しないアメリカの「共和」制がいかんにして関心の的になっただろうか。本研究は、そうした翻訳の意図の解明を第一の目的としつつ、その分析結果を中村の思想全体のなかでどのように位置づけるべきかについて考察した。

以上のような研究目的を遂行するためには、『共和政治』の初版本と中村が用いたバージョンの原著が必要である。当該書は、成蹊大学図書館が所蔵している中村の洋書旧蔵書のコレクションとして残されており、本研究はその手沢本を用いた結果である。両テキストの綿密な対照分析を行い、翻訳された部分と省略された部分を周到にチェックし、また使用している翻訳語についても注意を払った。

こうした作業は、明治初期日本におけるアメリカ政治体制の理解の具体像を明らかにすることで、中村正直の政治思想家としての側面を浮き彫りにし、彼を従来の〈非政治的〉というレッテルから解放するという結果にもつながるという意義を持つ。さらに、彼の〈制度〉に対する姿勢を明らかにすることで儒者としてのアイデンティティを再度確認し、近代日本における儒学の意見について再考を求める。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

本研究の研究経過と現時点における結果は、以下のとおりである。

1. 『共和政治』をめぐる周辺事情の調査

成蹊大学図書館が所蔵する「中村正直先生文庫」(以下、中村文庫)は、中村の没後(1891)、静嘉堂文庫に移された「敬宇文庫洋書」(789 冊)の中、624 冊が寄贈されたものである。本研究では、中村文庫に入っている Ransom Hooker Gillet の *The Federal Government; its Officers and Their Duties*(1871)、つまり、中村本人の手沢本を用いて研究を進めた。手沢本とはいえ、翻訳者の書き込みなどを発見することは叶わなかったが、赤い付箋が貼ってあった痕跡は多数見つけることができ、この手沢本をもとに翻訳作業が行われたことと見なした。この点が重要である理由は、中村文庫所蔵本の *The Federal Government* の扉には、伊藤博文の署名が書かれており、署名の日付に「January, 20th, 1872」と書かれているからである。この日付は、ちょうどいわゆる岩倉使節団の一員として伊藤がアメリカに滞在していた時期であり、高い確率で、当地で刊行されてから間もない本書を伊藤本人のチョイスで入手したと考えられる。

翻訳された『共和政治』は 1873 年 10 月に刊行されている。中村が、前年 6 月に大蔵省翻訳局長に就任し、半年足らずで退官している事情を念頭に置くと、版元は同人社であるにしても、政府(翻訳局)との関係を見捨てることはできない作業であろう。さらに翌年には、左院編輯局の依頼で『英国律法要訣』(1874.12 刊行)の第一編を訳していることに鑑みれば、この両書の翻訳は、中村本人の意思のみによるものではなかったように思われる。

2. 翻訳の意義をめぐる考察

中村は前作ら(『西国立志編』1870-71、『自由之理』1872)同様、原文より詳細な敷衍説明を

いくつかの箇所に入れ、日本の読者の理解を妨げると判断された部分は大胆に省略している（細かい歴史的な背景など）。ただし、本書では省略の範囲が原書の半分以上に及ぶため、明らかに原著者の執筆意図とは異なる、訳者固有の関心が反映されているものと見做すべきであろう。

中村は、『共和政治』の「引」において、アメリカでは、政治と「教法」（宗教）がいかなる関係にあるのか、といった問いに答えを得るため本書を訳したと明らかにしている。それは、トクヴィルが『アメリカのデモクラシー』において「教法」による「人心」の「協和」と、「国運」の「維持」を確信するようになったと述べたことに触発されたものである。彼は、日本の読者が「合邦政体の大略」を知り、その長所を模範にして実行して欲しいという念願をもって同書を翻訳したという。特に、アメリカ政治の最大の特徴である大統領制についての説明が『共和政治』では省略されていることから、訳者の関心は明らかに当時のアメリカの政治制度そのものより、アメリカ合衆国建国に至るまでの過程、特に宗教の自由を求めて新大陸に定着した人々の具体的な制度設計の過程にあったと考えられる。ただし、「政体律法」のみ真似しても、「教法」のような国民の精神を支えるものがなければ、それは「生人之精神」が入ってない「木偶」のようなものに過ぎないと注意していることから、制度に対する彼の関心が依然として「教法」に対するそれより劣位にあるという事実をも確認できる。

以上の内容を踏まえて、今後、前述の『英国律法要訣』との内容比較を通じて、中村の「政体論」を補強して行きたい。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

- ・ 2025 年度日本思想史学会大会(2025 年 11 月、京都大学にて開催予定)において個人研究発表予定
- ・ 論文集、エディ デュフルモン・町 泉寿編『自由民権運動期におけるヨーロッパ思想と儒学—接触、交流、翻訳—』（汲古書院 2026 年 3 月刊行予定）に寄稿予定

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。